

伏見康治著作集

報 月
(5)
第 4 卷
1987・6

阪大時代の思い出 小林 稔 1

伏見さんは毛が一本足りない 森永晴彦 4

伏見先生の折紙 小谷恒之 6

みすず書房
東京都文京区
本郷 3-17-15

阪大時代の思い出

小林 稔

はじめて伏見康治氏に会ったのは昭和十三年、それまで理化学研究所仁科研究室にいた私が、湯川秀樹先生や坂田昌一君のすすめで、大阪大学理科学部に着任したときであり、思えば茫々五十年も昔のことになる。

当時の阪大理科学部は創設後まだ数年で、新しい学問の府として活気に満ちていた。教授陣は、学部長級の真島利行先生や八木秀次先生は別格として、ほとんど三十歳代の若さであり、数学、物理学、化学の各学科の教授は東大、東北大、理研などから集められた新進気鋭の先生方ばかりで

あった。

建物も大阪のと真中の中之島に新築され、当時の大学の校舎としては異例に近代的であった。今から思うと、国外では日中戦争が中国全土に拡大しており、国内では二・二六事件の翌々年という大変な時期であったが、この建物の中はまことに平和であって、そのころの若いスタッフたちは何にも煩わされず、各自アカデミックな研究に没頭していた。(この校舎も戦局がはげしくなった数年後から次第に荒廃し、戦後理科学部が石橋に移って以来空き屋になっていて、今では取壊しが始まっていると聞き実に今昔の感に堪えない。)

さて、私が着任した頃の物理学科の講師、助手はほとんど二十歳代であり、そのなかに伏見講師(昔の同僚のよしみで以下伏見さんと呼ばせてもらう)がいたのである。当時、伏見さんは多分まだ三十歳には間があり、独身で、理科学部のすぐ近くに下宿していたように思う。阪大理学部へ

着任する前から、東大から来た伏見さんという非常にできる人がいると聞いていたが、会ってみて実に才気煥発、それでいて謙虚で礼儀正しい青年であることを知った。当時の伏見さんの颯爽とした風采は五十年後の今も鮮やかな印象として残っている。また、教授陣を除いてはほとんど関西育ちであったスタッフの中で、東京高校、東京大学出身というチャキチャキの東京っ子であった伏見さんは、他の人達と少し肌合いがちがっていて、少々煙たい印象を受けたようにも憶えている。

ここで、物理学科内での伏見さんの所屬や専攻分野を述べるために、初期の阪大物理学科の体制に触れておこう。戦前の帝国大学の学部内であるから、いわゆる講座制が敷かれていたことは当然であるが、この物理学科ではそれが全くといってよいほど形骸化されていて、実際の運営は講座制を超えた研究グループ制ともいべき体制をとっていた。そのような運営ができたのは、多分、学科主任や学部長を歴任された八木先生の政治力によると思われる、その後には初代の総長、長岡半太郎先生の考え方もあったのであろう。その様子を伝えるために、ここで自分の経験を打ち明けておこう。私が大阪大学へ着任して最初に八木先生の室へ挨拶に上ったとき、君は理論だから形式上は岡谷辰治教授(相対論)の講座の講師ということになるが、それは全く形式であって、実際は菊池正士教授のグループに属

していると思っていればよく、湯川君や坂田君と一緒に菊池君のグループの中で仕事をしようにといわれたのには一寸驚いたことを憶えている。後で人づてに聞いたところでは、人事だけではなく、学科内の校費の配分なども八木先生がひとり決めておられたとか、このように物理学科は八木先生の独裁で動いていたようである。独裁専制もうまく行けば最も能率のよい体制であり、阪大の物理学科の場合はそれがうまく行われた一つの例であろう。

大分話がわき道にそれたが、そういう訳で伏見さんも、形式的には多分岡谷教授の講座の講師であったと思うが、実質的には菊池研究室の一員であり、しかも、伏見さんの場合、それにはとらわれずいわゆる一匹狼的存在であるように見えた。そのころの菊池研究室では昼食時に全員が大部屋に集って弁当をとりながら雑談し、碁や将棋などなどごやかに過ごしたが、伏見さんはいつもその仲間に加わって

いて、時には将棋もさしていたように思う。周知のように、菊池研究室は原子核実験が主な研究課題であったが、ここでも各自の専攻はかなり自由であって、坂田君や私は当時助教授であった湯川先生の室にいて、その頃漸く注目を浴びるようになった中間子論の展開に専念していた。伏見さんはその才気で、実に手八丁、物理学のどの分野にも興味をもち、広い学識をそなえていたが、阪大の初期には統計力学確率論に重点をおいていたようで、

講義は統計力学を担当していた。この講義は学生の間で名講義として評判が高かった。中には難解だという声もあったが、それだけ程度の高い講義だったのだろう。

伏見さんは当時あまり人との協同研究という形をとらず、一人で思索することを好んでいたようである。これは頭の回転が速すぎて、他の人たちとの協力がまどろっこしかった故であろうか。あるいは、後に紋様や折紙に強い興味を示すようになったことからみて、直感や思考形式に人とは少しちがうところがあったためかも知れない。

実際、若いころの伏見さんは、頭の回転が速いばかりでなく、筆が立ち、ものを書く速度もおそろしく速かった。それは『ろば電子』その他の名著からもわかるが、少し後に私が出版社から近代物理学全書という叢書の企画を依頼されて、伏見さんには量子統計力学という一巻をおねがいしたところ、六〇〇頁を越す大冊をあっという間に書き上げられたのに敬服したことがある。

伏見さんは理論ばかりでなく、菊池研究室で実験に熱中していた時期もあった。それもやはり協同研究に加わったのではなく、中性子の散乱か何かの実験をひとりですこつやつやっていたように思う。そのころ、煙草で指を茶色にしていたのを憶えている。これは昼は研究室で実験、夜は下宿で理論という激しい研究生活からくるストレスをやわ

らげるためであったのだろう。間もなく結婚し、西宮で家庭をもたれてからはそういうこともなかったように思う。

話しかわるが、私が阪大に移ったころから当時の物理学科の講師であった伏見、林龍雄、奥田毅、坂田の諸氏（後に伊藤順吉氏、渡瀬譲氏らも加わった）で講師会をつくり、毎週一回理学部に近い住友クラブとかの食堂で昼食を共にすることになっていた。どうして、一学科にこのように多数の講師を発令することができたのか今でも不思議に思うが、やはり八木先生の手腕によってそうなったのだろう。

この集りは物理学科内の風とおしを非常によくしていたように思う。近年になって伏見さんが阪大時代の仲間と一度集ってみたいともらしていたが、多分このメンバーを懐しんでのことであったのだろう。そのころの物理学科では毎週一回共同の談話会があり、専門外の話を書くことになっていた。私が当番のとき、着いたばかりのボーアの核分裂の論文の紹介をしたことがあり、それもあとで講師会の話題になったように憶えている。その論文に、この過程は連鎖反応になる惧れがあるから実験の際に気をつけねばならない、とあったように憶えているが実に今昔の感である。そこで思い出したが、そのころ菊池研究室にいた彦坂忠義氏がウランと炭素の層を交互に積み上げると核エネルギーが取り出せないだろうかといっていた。余談になったが、そのころわが国にもそういう発想をもつ人がいたことを付

け加えておく。

私が阪大へ来た翌年、湯川先生と坂田君が京都大学へ転出し、そのあと伏見さんが助教授に昇進して、湯川先生がいた室へ入ることになり、私も同室へ入れてもらって、その後、私も京都大学へ移るまで、約五年間机を並べるようになった。最初に伏見さんは少し煙たい存在であったように書いたが、この期間にすっかり親しくなり、公私ともずい分お世話になった。私が京都へ移ってからは、研究分野の重なりもないまま、次第に疎遠に過ぎようになつたが、阪大での伏見さんとおつき合いの思い出は今も懐かしく胸裡に残っている。

（京都大学名誉教授）